



僕は世界を

守りませんでした。

(前編)

(C)2023, ソンム製作所

第一章第一節

重厚な鉄の扉。

僕より二回りは大きい。

この両開きの扉の向こうが謁見の間で、ここに彼女が居るに違いなかった。少なくとも、扉の中央に貼つてある木製の真新しい案内札にはそう書かれていた。

「謁見の間 お疲れ様でした。ここが勇者様の目的地です」

親切なのか罠なのか、今回は城に向かう道からこんな調子だった。

ところどころに案内札や看板が設置してあつて、僕を迷わせない工夫が凝らされている。城内も広大かつ複雑な造りのはずだが、案内札のおかげで入城からここまで10分もかかっていない。

襲ってくる敵もいなかった。

敵どころか人つ子一人いやしない。

覗き見られているような気配はあつたものの、今のところ実害はない。

もちろん、僕の体を傷つけるような罠の類も皆無だ。

いや、正確には違うな。

この扉の向こう。

そこで待ち受けている彼女が、僕にとっての罠なんだ。

今までの懇切丁寧な案内も、その罠に僕を効率的に追い込むための仕掛けにすぎない。

この城の主は魔王軍8大将の1人、『淫魅姫ファシーラ』と呼ばれるサクユバスだ。

すでに4人の大将を倒したが、どれも怪力バカだったり知性があるのかどうかも怪しい化け物だったり、果たして大将と言えるよ

うな存在なのか疑問の残るところだ。

本物の大将は4人で、残りはただの下っ端だったのでは・・・？

僕は鉄の扉の案内札に目をやった。

これだけの知性を持つ敵は初めてだ。

案外ここからが本当の戦いなのかもしれない。

僕は負けるわけにはいかない。

魔族達の蠢行に苦しめられている人々を救うため、相手が誰であろうと僕は負けるわけにはいかないんだ。

金属製の冷たい取手を握ると、僕は意を決して扉を開け放った。

予想に反してドアは軽く、静かに開いた。

室内は思ったよりもこじんまりとしていて、来賓を招き入れるように手前から奥へと灯具が左右一列に並べられている。

部屋の奥は3段の階段があつて高くなつていて、最上段には金の装飾が施された豪華な玉座が置かれていた。

しかしその玉座は空席だった。

僕は謁見の間に足を踏み入れ、そのまま進んでいく。

部屋の奥にたどり着いて階段の一段目に足を乗せる。

どう見ても玉座には誰もいなし、部屋のどこにも人の気配はない。

この謁見の間には太い柱や大きな仕切りの類はなく、陰に隠れることもできない。

無駄足だったか。

案内札を信用した僕が愚かだった。

僕は玉座を一睨みして怒りと恨めしさをぶつけると、謁見の間の出口に目を向けた。

「ようこそ我が城へ。はじめまして、勇者様」



唯一の出口である両開きの扉の前に彼女が立っていた。

一体どこから現れたのだろうか。

だが僕にとつての最大の驚きは、彼女が現れたことではなかった。

ここに彼女が現れるのはむしろ当然のことだ。

この部屋は来賓を迎え入れる場所なのだから。

僕がもっとも驚いたこと、それは彼女の姿だった。

どう見ても・・・彼女は・・・

去年の春に買ったエロゲー『敗北はロマンスの輝き』のヒロイン『ミレーヌ姫』にしか見えなかった。過去一番、断トツでお世話になったあの子。

あの子がまるでディスプレイから抜け出て三次元の実体を得たかのような。

いいや、そんなバカな。

これは幻術だ。

彼女は『淫魅姫ファシーラ』だ。

「ああ、はじめまして。僕はケンスケ」

「わたくしはファシーラ。この城の主にして上二大将の1人です」

上二大将だって？

そんな役職は初耳だ。

この世界に来てから色々説明を受けたけど、上二大将なんて役職は一度も聞いたことがない。彼女は余裕を感じさせる笑みを浮かべて僕のほうに歩いてくる。

背後の出入り口から吹き込む微風のせいか、僕の嗅覚はほのかな香りを嗅ぎ取った。

果物のような、春の花のような心地良い匂いだ。

「八大将の1人じゃないの？」

「ふふふっ、大将は8人もいませんわ。4人だけ」

言いながら近づいてくる。

ただでさえ僕の胸を締め上げるような美貌の持ち主なのに、露出度の高いドレスが彼女の美しさを更に増している。

「美しい」という形容詞一つでは到底表現しきれないほど魅力的だ。

「人間達は偽の情報をすっかり信じ込んでいるようですね」

脳裏に焼き付くような端正な顔立ちだけではなく、男の本能に直接訴えてくるメスとしての体つきの良さ。

呼吸すら忘れてしまいそうになりながらも、僕は肺に溜まった呼気の塊を吐き出した。

「どうやらそうらしい。けど、君が重要な人物だっことは間違いない」

「ええ、勿論。魔王様に仕える2人の上大将のうちの1人ですから」

それはまずいな。

2人しかいない上大将の1人ってのは手強すぎないか。

この世界にいる限り、僕は並外れた身体能力と魔力を持つ勇者だ。

しかし如何せん初心者。

一週間前に冒険を始めたばかりでたいした経験は持ち合わせていない。

彼女は今や眼の前に立っていた。

手を伸ばせば頬だっって触ることができる。

剣は鞘に収まったまま。

両手は剣から離れていて、構えてすらない。

見惚れることに精一杯だ。

戦う準備などできるわけではない。

距離が詰まったことで彼女の甘酸っぱく優しい香りが僕の全身を包み始める。

僕の鼻孔は『ミレーヌ姫』が漂わせる芳香に感激し、オトコとしての本能が次第に鎌首をもたげ始めている。

ミレーヌ姫・・・

ディスプレイ越しにしか見ることでできなかった彼女を、今僕はぬくもりを感じられそうな距離で見つめている。

僕は彼女の香りを肺にたっぷりと吸って楽しみ、微笑み混じりの愛くるしい表情にドキドキしてしまう。

僕らは向き合って、少しの間お互いをよく観察した。

それにしても本当に美しい。

やっぱり見た目はミレーヌ姫そのものだ。

だが・・・

僕は理性を振り絞って否定した。

彼女はミレーヌ姫ではないし、また、その辺の雑魚敵でもない。

大物どころかほぼ総大将だ。

傍に来た彼女から漂っているのは女としての色香だけではない。

余裕と自信に溢れた物腰には魔王の片腕としての貫禄が漂っていた。

僕は圧倒されがちになりながらも、好奇心に満ちた目で見つめてくる敵に闘志を振り立たせた。

「ここで、僕の息の根を止める？」

「息の根？」

「そうね、どうかしら。あなた次第かしら」

彼女の言葉と表情から察するに、どうやら答えを探っている様子らしい。

「あなたこそ・・・どうなの？わたくしの息の根を止めに来たでしょう？」

「君が悪い魔物なら」

「悪い魔物などいないわ。皆、人間に滅ぼされるのを恐れて戦っているだけ」

「でも、人間も沢山死んでいる。村も町も壊さたり焼かれたり。見たくもないひどいところを何度も見た」

「それだけのことをしたから。そのようにされるだけの理由があるのです」

彼女の眉毛はすっかり釣り上がっていた。

内に秘めた憎悪が燃え盛って瞳に映っている。

これは戦争なんだ。

人間と魔物が生存を賭けて戦っている。

綺麗事では解決できない。

それは分かっているけど。

「君は・・・戦うのは好き？僕は好きじゃない」

「わたくしも命を減らす争いは好みません」

「そうなんだ。じゃあ、少なくとも僕達は話し合えそうな気がする」

「いいえ。そうとも限りませんわ。命を増やす争いなら大好きだから」

「命を増やす？どういうこと？」

「さあ・・・？」

「1つ忠告しますわ、勇者様。わたくし達サキュバスはとても恐ろしい魔物です」

「もし、僅かにでも対応を誤れば・・・あなたも、あなたの世界も破滅してしまいます」

「あなたの住んでいる、こことは異なる世界。それが滅んでしまうのです」

「ここみたいになるってこと？」

「いいえ。ここ人間は魔物との戦い方を心得ています。でも、あなたの世界はそうではない。そのように聞いています」

「そうか、僕らの世界の場合は不意打ちになるから・・・」

「簡単に滅ぼせるはずですよ」

「だから、勇者様に最高の策を授けますわ」

「今すぐこの世界を離れて下さい。あなたとあなたの世界を守るため、そしてこの世界の本来の流れを変えぬために」

「この世界に干渉するなと？」

「はい。あなたの存在をわたくし達は歓迎しません」

だろうな。

僕1人のせいで文字通りこの世界の命運が変わってしまうんだから。

「わたくしのこの姿を見ればわかるはず。サキュバスは恐ろしい力を持っています。そのような魔物と関わってはなりません」

「いますぐ元の世界へ帰るのです。そして二度とこの世界に来てはいけません。今ならまだ間に合います。あなたの世界を守ることが出来る」

このまま王城に戻るとして、国王陛下にはどう報告したものか。

大臣や將軍達も納得しないだろう。

国王から村人まで、子供から年寄りまで僕に希望を賭けているというのに。

彼らの気持ちを無下にできるだろうか？

この世界の人間の運命は僕に掛かっているんだ。

僕はこの世界を守らねばならない。

「僕がこの世界を去ったら、この人間達は殺されてしまう」

「報いを受けるだけ。己の為した行いに対して」

「許すことはできないの？」

「まさか。彼らの悪行は決して許されるものではありません」

「でも、こうして僕らは話し合えるわけだから・・・何かいい方法を考えるべきじゃないかな。君と話せば、何か思いつく気がする」

「その感覚はつまり・・・好意を抱き始めているということなの」

「あなたはわたくしを好きになり始めている」

「だから急がなくてはいけない。今すぐここを去り、わたくしのことを忘れなくてはいけません」

「わたくしは上二將軍の1人として、魔王様の軍団を勝利へ導く責務があります」

「けれどそれは、今のところこの世界での話。勇者様の世界まで巻き込む気はありません。少なくとも、今のところは」

「それは・・・脅迫？今退かなければ僕の世界まで攻撃するってこと？」

「脅迫に聞こえる？これは助言よ」

「そしてこの助言には、異世界の住人であるあなたに対しての、心からの誠意が込められている」

「ほら。早くお逃げなさい」

「ここに居ては危険よ。今すぐ去って。わたくしの気持ちが変わらぬうちに」
どうしたものか。

もしここで逃げれば・・・

彼女は魔物達の指揮を続けて、さらに人間の犠牲者が出る。

かと言って、果たして戦って勝てる敵なのか。

判断するには情報が少なすぎる。

どうしよう？

「即答は期待できないよね」

「この世界に来てこんなに悩むのは初めてだよ」

「なにゆえ悩むの？」

「判断材料が少なくて。君と戦うべきかそうでないのか、腹が決まらないんだ」

「では、何が分かれば決められる？」

「例えば・・・君のこと」

「ふふふっ、わたくしのことですか？」

彼女は豊かな髪を掻き上げて僕に微笑んでみせた。

「わたくしのことを知れば知るほど、より知りたくなる。話せば話すほど、さらに話したくなる」

「わたくしをいくらか知る頃には、あなたの世界の将来は決まっています」

「そうなる前にあなたはここを離れなくてはいけない。できれば、今すぐ」

「もし善意で言ってくれてるなら・・・やっぱり悩むな。邪悪でもない相手を倒す気にはなれないよ」

「いいえ。とても邪悪よ。邪悪で危険な存在です」

「わたくし達サキュバスは欲望の生き物。特にあなたのような若い男、未熟な個体には目がないの。まして、初モノなら尚更ね」

「そうか・・・じゃあ・・・やっぱり君を放っておくわけにはいかない。君を止めないと。これ以上被害を出さないように」

「けれど、そうしてわたくし達の戦いに干渉することが、結果としてあなたの世界を滅ぼすことになるのです」

「ここで君を止めればいいんだ。そうすれば僕らの世界に影響はない」

「そう・・・わたくしを止められると？そう思うのね」

「では、試してみましようか。とりあえず一度」

「正直君を傷つける気はない。けど、君を放っておくわけにもいかない」

「わたくしも上二將軍の一人。よくよく考えてみれば勇者様を見逃すわけにはいきませんわね
こうして話せる相手だ。殺す必要はない。

戦った後でもう少し話し合えばいいんだ。

きつと上手いく。

そのために、よりよい結果のため、多少彼女を傷付けることはやむなしだ。

僕は劍の柄に手をかけた。

「物質界からの打撃は効きませんわよ」

「そうか、じゃあ魔法なら」

「いいえ。魔法もまた物質界からの打撃に過ぎません」

「じゃあ、どんな攻撃なら有効なんだ？」

「精神界に存在するわたくし達の実体を打つのです。いかなる武器も効果はなく、わたくし達の思念を攻撃して屈服させるほかありません」

「どうすれば？」

「例えば・・・そうね・・・」

「愛し合うことよ。より正確には、激しい交わりでわたくし達の精神を屈服させるのです」

そういえば以前、そんな名作エロゲーを遊んだことがある。

サキュバスには武器も魔法も無力で、性的な攻撃でしかダメージを与えることができないんだ。

「けれど実際、人にとってはとても困難なことなの。ほとんどの場合、逆にわたくし達に屈服して奴隷に堕ちてしまう」

「奴隷に堕ちた者は・・・」

「それは別の機会に話すとして。仮に一戦交えるにしても、それは危険過ぎる行為です」

「ねえ。もう一度だけ考えて。このままではあなたの世界を滅ぼすことになるわ」

「それはわたくしの本意ではないの。だから、この世界への干渉を今すぐ止めてほしいのです」

「一体何回同じ台詞を繰り返すつもりなんだ？」

「こんなにしつこく僕を追い返そうとする彼女の真意は？」

「しかし脅迫とはこういうものかもしれない。」

「さも懇願するかのように自分の要求を繰り返す。」

「彼女は敵の大将。」

「敵なんだ。」

「言葉を鵜呑みにすることは出来ない。」

「僕はそんなに愚かじゃない。」

「戦ってみたい」

「あら・・・そう。あなたの世界をわたくし達にくださるといふのね」

「いいや、君を止める。僕の世界も、こっちの世界も守る気だ」

「彼女はスツとその美しい顔立ちを僕に近づけた。」

「まあ、頼もしい。さすがは勇者様。遙々遠い世界から召喚されただけのことはありませんわね」

「あなたのような無知で純真な子は大好きよ。そして・・・」

「僕に抱きついてきた。」

「頬を擦り合わせ、しがみつくように僕を抱いてきた。」

ドレスの布地とミレー又姫の身体が僕に柔らかく絡みついて、質感とぬくもりで五感を圧倒してくる。

甘酸っぱい芳香はこれ以上ないくらい濃くなって、僕の鼻は心地良さと悦びのあまり何度もヒクついてしまう。

「やはり。童貞の匂い」

「どうして？良き相手と巡り会えなかったの？」

「それとも、案外奥手なのかしら？」

突然抱きつかれ、僕の頭は桃色一色に染まっていた。

ミレー又姫の言葉は聞こえても、その意味を解して答えを返すことができない。

散々お世話になった娘だ。

そんな子に抱かれたら・・・

本能が命じる反応は一つだった。

僕はミレー又姫のなめらかな背に両手を当てると、できるだけそっと、自分のほうに抱き寄せた。

「ああん♡勇者様あ♡もつと、もつと強くっ♡」

脳細胞を溶かし尽くしそうな甘ったるい声に抗えず、僕はドレス姿のミレー又姫に腕を巻き付けて一息に抱き締める。

「あっ。いいわ・・・これでいい」

「これからはわたくしがお相手します。他の女のことなど考える必要はありませんわ」

「うん・・・」

「いっぱい楽しませてあげる。死ぬほどね」

「死ぬ・・・？」

「ううん、大丈夫。殺しはしない。殺すどころか、死んでも死ねない体に変えてあげますわ」

「サキユバスの恐ろしさ、その身をもって味わうが良いわ」

「うん・・・」

「いずれ、ね。今日の話ではないわ。安心して下さる」

「うん・・・」

「それで、勇者様？寝室に着きました」

ミレーヌは顔を離して、今度は鼻先を擦り合わせてきた。

「勇者様のご希望どおり、お手合わせして差し上げます。さあ、一緒に戦いましょう？」

「戦う・・・？」

「うふふふつ、忘れてしまった？勇者様は戦おうとしていたのですよ？わたくしと」

「上二大将の1人。敵のサキュバスと戦おうとしていたの」

そうだ、そうだった。

そうしなきゃいけなかった。

僕はいくらか理性を取り戻して、ミレーヌの心地良いドレスからどうにか手を離した。彼女は数歩後ずさって距離をとる。

僕の本能を狂わせていた淫魅姫の色香が薄れ、僕はやっと理性を取り戻した。

「思い出した？」

「ああ、うん・・・」

むしろ思い出させてくれたんだ。

彼女はサキュバス。

あのまま僕の精力を吸い尽くすこともできただろうに。

全力で殺しに掛かってもおかしくないのに、なぜ僕を助ける？

それとも、僕の戦意を煽った上で徹底的に嫩る気なのか。

彼女の後ろには金色の装飾が目をはく豪華な寝台があった。

寝台だって？

謁見の間にそんなものはなかった。

見回してみると、ここはそもそもあの謁見の間ではなかった。

「いつの間に移動したんだ？」

「今しがた」

ミレーヌ姫に化したサキュバスは寝台の縁にそつと腰掛けた。

「ねえ？あなたは一人も女を抱いたことがないのでしょ？いかようにしてわたくしを満足させるつもりなのですか？」

「それは・・・」

「サキュバスを倒すには何度も何度も、根気よく満足させる必要があります」

「あなたにそれができるとは到底思えません」

淫魅姫の正論には反論の余地がない。

僕は少し黙った後、正直になることにした。

「君の言う通りかもしれない。僕にはまだ早い相手かもしれない」

「だからこそ、これは貴重な機会よ。試しの一戦とはいえ、わたくしと一度手合わせできるのでから」

「負けても見逃してもらえらなら、確かに貴重な機会だ」

「それは・・・どうかしら」

「見て。この部屋に出口はありません」

言われて僕は室内に退路を探した。

ドアと呼ぶべきものが存在せず、四方が臙脂色の地に銀の刺繍の入った壁で囲まれていた。

窓からは夕日が差し込んでいるが、ここは敵の牙城だ。

窓を破って飛び降りたところで境界のせいで転移の魔法は使えない。

落下してミンチになるのが関の山だ。

浮遊の魔法が何かを掛けてもらうべきだったな。

「ここに来た男は死ぬか、奴隷になるかのどちらか。敵の男は皆そうなるわ」

「一部の例外はあるにせよ、ね。結末はほぼ同じ」

「そうか・・・実は試しの一戦・・・って感じでもないのか」

「そうでもないわ。城に飛び込んできた小鳥を殺めたりはしない」

「よほど不愉快な存在でない限りは」

つまり、僕の運命は彼女の気分次第ってことか。

この城に来たのは失敗だったな。

レベルが違う。

明らかにボス戦の順番を間違えている。

ああ、これがゲームの世界なら・・・

「『ロード』、とは？『ロード』とは何ですか？」

彼女は怪訝な表情を浮かべた。

「ろ、ロード？」

「はい。あなたの頭に今強く浮かんできた考えです」

「強敵と戦う前にはせーぶし、失敗したらロードする・・・」

「これが異世界人の思考・・・？」

「詳しく調べる必要があるわ。これらの思考も強さを成す要素の一端かもしれない」

「それは関係ないよ。あくまで、僕らの遊びの話だから」

大事なのはそこじゃなくて、このサキュバスが僕の心を覗いて、かなり正確に思考を読み取っているってことだ。

「いずれにせよ、あなたはわたくしの好奇心を大いに刺激する小鳥ね」

「詳しく詳しく、この手で羽根を捲って、体に触って調べてみたい」

「あなたも、わたくしを調べてみたいでしょう？」

サキュバスは優しく微笑んだ。

とても敵とは思えない親しげな雰囲気、僕の敵意はまたしてもゆらぎ始めた。

「それは・・・」

「来て。もっと近くへ」

聞いても聞いても聞き飽きることのない甘い声。

肌触りの良い布の手袋で耳の奥まで撫で回されているような気持ち良さだ。

ゲームの中のミレーヌ姫には予算の関係で音声はなかったけど、この声はすぐく彼女に合っていて魅力的に聞こえる。本当にいつまでも聞いていたい声だ・・・

「このままでは戦えませんわ。ベッドに来て。ここで2人で。一緒に戦いましょう？」

「うん・・・」

精神を支配されたわけじゃない。

少なくとも僕はそう感じている。

でも、だからといってミレーヌ姫の誘いに逆らう理由はなかった。

ミレーヌ姫は僕にサキュバスとの戦いを教えようとしてくれているんだ。

「違うわ。わたくしはミレーヌではありません。騙されてはダメ。わたくしはサキュバス」
サキュバス？

そうだ、ミレーヌに化けたサキュバスなんだ。
でも彼女は僕に教えてくれる。

こんな、最高にきれいなミレーヌに教えてもらえるなんて。

ああ、これ以上幸せなことはない！

僕はいつの間にミレーヌのすぐ前に立っていた。

彼女はベッドの縁に腰掛けたまま楽しげに見上げている。

本当にきれいで、心も体も蕩かしてくるほどの性的な魅力を感じる。

女の肌を見せつけるドレスがなんとも扇情的で、これから始まる「戦い」がどれほど気持ち良いものになるかを想像させてくる。
淫らな期待と興奮が胸の鼓動を制御不能なほどに高鳴らせる。

「わたくしは敵よ。淫魅姫ファシーラ。あなたにとって最悪の相手」

「なぜなら勇者様は、敵の異性に発情する特殊な嗜好の持ち主だから」

「うふふっ。考えもなしにここに来るとはね。呆れてしまうわ」

「あなたの愚かさの代償を、こちらとむこう、2つの世界の人間が払うことになるというのに・・・」

「勇者様は考えもなしにわたくしの前に現れた」

「変な話だわ。あなたよりわたくしのほうが、今、世界の行く末を案じているみたい」

「けれど、もはや救う手立てはありません。わたくし達の相性はとても良いことが分かりましたから。敵、敵と意識させるたびにあなたは興奮して良質な精液を捧げてくれるはず」

「もしかしたら、体を入れ替えて何百年も仕えてくれる伴侶になるかもしれない」

「結論は単純ね。あなたも、あなたの世界もわたくしのものになる。それだけのことです」

「だからあ♡勇者様は頑張ってえわるーいサキュバスを退治しないと、ね♡」

「うん、うんうん・・・♡」

「サキュバスの本当の姿はとも禍々しいのよ。人間の目から見ると、飛び上がるくらいおぞましい姿なんだから」

「でもね、人間は愚かだから。偽りの姿に騙されてえ♡うふん♡永遠の愛を誓って奴隷に堕ちちゃうの♡」

艶っぽい声で言われながら、自分が奴隷に堕ちるところを想像してしまう。

ミレーヌ姫の永遠の愛の奴隷。

相手はサキュバスだ、死ぬほど気持ち良いエッチができるに違いない。

卑猥な妄想を巡らせるにつれ、僕の心臓の脈動は益々速まってしまう。

「それで、勇者様？その邪魔な装備を外して頂けませんか？」

「わたくし達の戦いは心の戦い。剣も鎧も意味がありません」

「うん、そうするよ」

僕は剣と背負い袋を壁に立て掛ける。

ミレーヌ姫の目の前で革と鋼の部分鎧を外し、剣の傍に並べた。

数分かけて僕はジャージ姿になった。

この世界では奇妙な格好らしいが、日本ではおかしな服装ではない。

特に、激しい運動が要求される場面では。

ミレーヌ姫は無言で僕を見つめていた。

「服も・・・脱いでいい・・・？」

「勿論ですわ。けれどその前に」

「魔法の品を全て外してほしいのです」

「それは・・・」

2つのペンダント、3つの指輪、ブレスレット、宝石のあしらわれたベルトバックル。僕にとってはこれらのアクセサリーこそが真の防具だった。

それぞれが物理攻撃と魔法攻撃に対する多層防御の一角を成しており、どれか1つでも外してしまえば致命的な脆弱性が生まれることになる。

王宮の魔術師達からも絶対に外してはならないと何度も念を押されていた。

「このままではわずかに抱き合うだけで精一杯。夜を共にすることなど到底叶いません」

「でもこれは・・・外してはいけないものだ」

「でしょうね、それほど強力な品ならば。わたくしの企みをことごとく妨げてくる。邪魔で仕方ありませんわ」

「これは僕の命を守ってくれている品だ」

「ええ、無論。けれど、そうして着けている限りわたくしとは戦えませんわよ」

「貴重な機会ですのに。高位のサキュバスと戦える。このような機会はそうそう巡ってくるものではありません」

「仮に外したら。身の安全は保証してくれる？」

「さて・・・？」

「愛らしい小鳥なら鳥かごに入れたくなるやもしれませんし、さもなくば・・・」

ミレーヌ姫は冷たく微笑むと、鳥を押さえつけて首をねじ切る残酷なジェスチャーを見せた。

「うふふふ。すべてはあなた次第です」

「え・・・」

「いいえ、冗談です♡大丈夫。あなたの身の安全は保証するわ」

ミレーヌ姫の表情がパツと明るくなって僕は胸をなでおろした。

「今夜の戦いはあくまで試しの一戦です。その結果はわたくし達お互いの生き死に影響しない。そのように取り決めましょう」

「ああ、うん・・・」

ミレーヌ姫の人懐っこい笑顔に癒やされ、次第に緊張が解れていく。

しかしさっきの烏を殺す仕草には恐怖を感じた。

目の前に居るのは本物の魔物、サキュバスの総大将だ。

果たして魔法の装飾品を外すべきか・・・

「約束します。明日朝まで勇者様を保護するわ」

信じたい。でも信じるべきだろうか？

こんなに綺麗で、好みの声で、官能的な身体を持ち主のミレーヌ姫。

しかしそれは全部偽り。

ミレーヌ姫の正体は淫魅姫ファシーラなんだ。

僕は自身がまだ理性を保っていることを認識して、最善の方策を探ろうとさらに思考を巡らせる。

「この命をかけてあなたを守るわ。ですから、安心して魔法の品を外して良いのです」

「そう、ここでは安心して良いの。肩の力を抜き、気を楽にしてもに夜を楽しみましょう」

ファシーラは艶やかな髪をこれ見よがしに掻き上げた。

「勇者様は心惹かれるものをお持ちです」

「こうして何度か戦ううち、魔王様を裏切ってしまうかもしれません」

「え！？それって・・・」

「あなたの味方として、傍に控える存在になるかもしれないということ」

「それは心強いな」

「うふん♡心強いだけでなく、恋人としても最高でしょう?」

「これ以上の人はいないよ」

「今は敵同士。けれど、だからこそ、余計に強く引き合っている気がします」

「最高でしょう?この姿は。顔立ちから身体つき、髪から耳の先まで。今は完璧なはず。最高の相手に見えるはず」
彼女の言うとおりだ。

全体の雰囲気はもちろんのこと、脳が痺れるほどの甘い声、どんな女性よりも好みな丹精で包容力のある顔立ち。

そして首から下は、僕の劣情を果てしなく煽り立てる身体つき。

豊満で形の良いセックス専用のバストは言うに及ばず、腰のくびれから臀部は妊娠を僕にせがんでくるようだし、ふっくらして精液をいくらでも搾り出せそうな淫乱な太ももは、もはや男根が待ちきれないらしくひたすら色気を大量に放って僕を誘っている。

そしてドレス。

こういった貴人の衣装は本来、純粹さと清楚さ、高潔さに満ちているはずなのに、このドレスはミレーヌ姫の身体のいやらしさを何倍にも増しているようだ。

見ているうち、僕の精神は彼女の魅力に急速にのぼせ、本能は白く濁った欲求に染まっていく。

たちまち僕の肉体はミレーヌ姫の色香に参ってしまい、欲望を抑えきれなくなった。

彼女の前で膝をつき、つい手を伸ばしてしまう。

左手はドレスから溢れた魅惑の太ももを掴み、ほぼ同時に、これみよがしに実る豊かなおっぱいに正面から右手をあてた。

「ああん♡」

途端にミレーヌ姫の鋭い嬌声が室内に響く。

あまりに甘い声色に僕の脳髓に電撃が走った。

彼女の肌の触感を愉しむ前に、その声の失神しそうなくらいの気持ち良さに僕はびくりと身震いした。

「我慢できなくなりましたか？」

「うん・・・ごめん・・・」

いけないことをしている。

それは分かっているが、僕はオスの衝動を止められない。

ミレーヌ姫の太ももをそっと撫でながら、右手の平でおっぱいを包んで触り心地を確かめる。

太ももの滑らかで張りのある感触、おっぱいのふわふわしてムッチリとした質感。

至高のメスの上肢と下肢を同時に味わう快感に僕はただただ圧倒されて、思考が止まってしまふ。

特におっぱいは僕の心臓を破裂させそうなほど最高だった。

ドレスの向こうに隠れた乳首の存在がはつきり分かった。

情欲に燃える乳頭はすっかり凝り固まって僕の手を押し返し、快楽に満ちた熱い夜を催促している。

僕は・・・

この人がほしい。

この人が大好きだ。

大好きなミレーヌ姫。

この人と一緒に心とカラダを満たし合いたい。

互いの性の渴望を満たさなくては。

僕達はこんなにも求めあってるんだ。

セックスしたい。

思い切り愛を込めて、何度も何度も。

それで、もしかしたら仲間に見えるかもしれないんだ。

上手く行けば・・・！

結婚できるかもしれない！！

今や、彼女を抱く以外選択肢はないように思える。

「さあ、魔法の品を外して。続きを楽しみたいでしょう？」

僕はさらに左手で太ももを弄り、右手に掴んだおっぱいを鷺掴みにした。

もっと、もっとこの気持ち良いカラダを味わいたい。

でも・・・

これは色仕掛けかもしれない。

罠かもしれないんだ。

「ねえええ♡早く♡早く邪魔なものを外してえ♡」

オスの官能を痺れさせる甘ったるい声でねだられ、僕の思考回路はあちこちで火花を散らして焼け焦げていく。

でも、でも。

魔法の装飾具を外せば僕は無防備になってしまう。

自分の身を危険に晒すことになる。

あろうことが敵の大将の眼前で。

「ねえ勇者様。ちょっとお立ちになって。ソレを見せて頂けるかしら」

「うん・・・」

心地良い声に促されるまま、僕は彼女のカラダから手を離して直立した。

「あまり待たせるものではありませんわよ。相手が想い人ならば尚の事。早く外すべきですわ」

何かいやらしいことを期待して立ってみたものの、どうやら彼女は少し苛立っているらしかった。

「ごめん、そういつつもりじゃ・・・」

僕が言い訳を始めるより早く、彼女は僕の股間に手を伸ばし、ジャージごしに玉袋を撫でてきた。右手の純白の手袋で転がすように、スリスリと2つの玉袋の下側を撫で擦ってくる。

「っっ、くっ・・・!」

単に手袋で撫でられているだけなのに、強烈な快感が睾丸を沸き立たせ、熱い情欲が玉袋から下っ腹まで一気に吹き上がってくる。

玉袋のドス黒い表皮と姫の手袋の間には、トランク스와ジャージが挟まれているというのに、まるで直接ロンググローブで愛撫されるような気持ち良さが襲ってくる。

精液袋に擦り付けられているのは間違いないトランクスの生地のはずだ。

それなのに滑らかで、ほどよく擦れて手指の柔らかな凹凸に包まれて。

何度か手袋の上質な生地で玉袋を擦られるうち、たちまち我慢汁が止まらなくなってしまった。

「くっ、んっ、はぁッ・・・」

「気持ち良いでしょう？けれど戦いが始まれば、こんな程度では済みませんよ？」

「邪魔なアクセサリを外してくれさえすれば。わたくしとは戦い放題、遊び放題」

「明日の朝まで好きなだけ戦ってあげますわ。あなたの望むだけ。望むやり方で」

「そして、それだけに留まらない。勇者様は最高の戦利品を得るかもしれないのです」

「ねえ、ねえ？欲しいでしょう？わたくしのこと♡わたくしをお♡あなただけのものに♡♡♡♡♡」

ミレーヌ姫の手の動きが一気に速くなった。

玉袋の下側だけでなく横も正面も裏も限なく撫で上げて、長手袋の布地の極上の肌触りを楽しませてくる。

すでに勃起しているペニスは固く猛り狂う一方で、ジャージに鋭い峰を作ってしまった。

トランクスは我慢汁に濡れ、びっしょりネットリした感覚を肉槍の穂先に伝えて暴発が近いことを警告する。

「ねええ♡してしてえ♡わたくしをあなたのものに♡わたくしもなりたいたいから♡勇者様だけのお姫様に♡」

「ミ、ミレー又姫♡」

ダメだ、手袋が気持ち良すぎる。

こんなスベスベで濃い性感を塗りたくる布地で責められ続けたら、僕のペニスは勝手に射精を始めてしまう！

「うっ！ああ！はあ！うっうっ！」

「んふふ♡だいぶ良いようね。堪えられない、といったところかしら」

「はあああっ！ああああっ！んんんっ！くううっ！」

僕の喘ぎ声がいよいよ最高潮を迎えたところで、ミレー又姫は唐突にロンググローブを陰囊から離れた。

「あなたの求めるものは、全てわたくしの中にあります。だから・・・」

「わたくしを勇者様のものとするため、魔法の品は皆外さねばならない」

「つまり、早い話・・・」

ミレー又姫は腰を上げるとベッドの中央に進み、肉付き豊かな艶めかしい脚を開いてみせた。

「あなたの固くなった棒を、わたくしの一番イイところに収めて・・・」

「そして何度もナカに出したいのなら、身につけているものは外さなければなりません♡」

彼女はベッドの縁を指さした。

突然僕の左の足元で、湿気った花火が爆発したような音とともに白煙が立ち昇る。

慌てて後ずさると、そこには小さな木箱が現れていた。

宝箱と言っには随分小ぶりだ。

箱は勝手に開き、空っぽの内部を僕に晒した。

「わたくしはもうその気です。今宵の他の予定は取り消しよ。一晩ずっとあなたに掛かり切りになるのだから」

「さあ、その小物入れに置いてください。わたくしの良いところに入れる前に、まずそのナカに。あなたの装備品を」

「ね？お願い♡」

「そろそろわたくしも我慢の限界ですわ。サキュバスってとても好色なの。あまり待たされると頭がおかしくなってしまうそう。

だ・か・らあ♡」

「はやく♡はやくオマンコにちよおだあい♡あなたのギンギンおちんぽ♡姫様のオマンコに早くハメてえ♡」

「その忌々しい品さえ外してくればあ♡もう、すぐにでも♡煩わしい前戯などなしに♡うふうん♡思い切り奥までハメハメ♡ナカに注がせて差し上げますわよあ♡」

あまりにも甘ったるい声で奏でられるミレーヌ姫の魅惑の誘いに、僕は頭も胸も下半身も、上から下まで桃色に焼け焦げてしまいそうになる。

サキュバス。しかもお姫様のオマンコだ。

ナカに入れたらどんなに気持ち良いんだろう？

溺れて、溺れまくってナカ出ししまくって子供が出来てしまったら・・・

責任をとらせてくれるかもしれない。

こんな人と結婚できたら毎日どんなに気持ち良いことだろう？

僕はきつと、彼女が妊娠しても構わず散々セックスに耽ってしまうだろう。

軽く想像しただけで、たちまち我慢汁の粘りは強くなり分泌量が急増する。

トランクスを貫通してジャージにもシミができた。

今こんなに誘惑してくれているお相手はミレーヌ姫。

建前も本音もはやどつてもいい。

断れるわけがない。

色仕掛けでも構わない。

ひどい目にあっても構わない。

ミレーヌとセックスしたい。

僕は腹を決め、指輪を外して足元の木箱にそつと置いた。

「安心して。約束は守ります。あなたを無事に帰すわ」

「罨でも・・・もう構わないよ」

「まあ嬉しい♡勇者様大好き♡」

ミレーヌは眩しいほどの満面の笑顔を見せてくれた。

その笑顔に背中を押されるように、僕は次々と大切なアクセサリを外して木箱に収めていく。

ペンダント、ブレスレット、革ベルト。

魔法の装飾具を外し終えた僕は、今度は脱衣を始める。

これからのことを待ちきれず、僕はジャージもシャツも靴下も、雑に丸めて箱に押し込む。

残ったのは正面がすっかり濡れそぼった地味な柄のトランクスだけだ。

僕もシートに上がろうとベッドに歩み寄る。

「あら、まだですね。脱ぎ忘れがあるようです」

脱げばキツくそり勃ったペニスがあらわになる。

これほど恥ずかしいことはない・・・

だが、これを脱ぎさえすればすぐにミレーヌと繋がれるんだ。

僕は言われたとおり、我慢汁まみれのトランクスを木箱に放り込んだ。

「そう、それでよいの。では・・・」

「ここに来て。戦って遊びましょう?」

僕は頷いて、彼女に誘われるまま寝台に上がった。

ミレーヌ姫と見つめ合う。

いつの間にか美しい微笑みは陰を潜めており、今はむしろ冷笑にすら見えた。

彼女は更に両脚を開いてドレスをめくり上げ、ロンググロープで純白の下着をずり下げた。

とうとう女性器が外気に晒された。

大小の唇を縦に2つ重ねたようにも、あるいは肌色の花びらを重ねたようにも見える。

周りに陰毛はなく、あるのは産毛らしきものだけだった。

陰唇の裂け目付近にはシワが集中していて、中にオレンジともピンクともつかない色のオナナの肉が垣間見えた。

おぞましくグロテスクにも見えるし、何も包み隠さない女性そのものとして好ましく繊細な姿にも見える。

とにかく女性器の印象は強烈過ぎて、僕はその生々しさにすっかり釘付けになってしまった。

こんなに美しい衣装を纏った姫君にも、こんな過剰に複雑で海産物を思わせるような「産むための器官」がついているのだ。

興奮していないといえば嘘になるが、むしろ、初めて見る女性器の強い印象に僕は固唾をのんでいた。

シートの上で膝立ちで突然とミレーヌ姫の股間を眺めている。

「そう珍しいものではないのよ。サキュバスにも人間にも、女にはこれが付いている」

「コレは悪いものではないわ。特にわたくし達のコレはね。殿方にとつての宝物。最高の快樂を楽しめる」

ミレーヌ姫は陰唇の縦筋に指を添えると、人差し指と中指で柔らかな膣口を開け広げた。

ビシヨビシヨに濡れている膣内の様子がはっきりわかった。

まるで胎内へと続く小さな喉みたいだ。

餌食が差し込まれるのを待ちきれないかのように、淫らな蜜が膣穴から次々と漏れ出して姫君の純白のグローブを濡らす。僕とミレーヌ姫の間の空間を満たしているのは香水の香りだけではない。

何かもつと、メスが生来持つ芳香が混じっている。

オスを交尾に誘うためのフェロモンのようなものに違いない。

僕の理性を焦がして本能を衝き動かすメス特有の匂いだ。

こうしてミレーヌ姫がマンコ穴を拡げている間も、その堪らなく甘いバラのような香りはひたすら濃くなっていく。

「安心して。約束は必ず守ります。だから、心置きなく楽しんでほしいの」

「うん・・・♡」

「さあ、サキュバスのもつても気持ち良い搾精孔に。あなたのガチガチのそれを・・・♡」

ミレーヌ姫は左手で艶めかしく髪を掻き上げ、僕の脳が蕩けそうなほどの媚びた笑みで僕を挿入に誘った。

もう、我慢する気はなかった。

そもそも我慢なんて不可能だ。

僕は吸い寄せられるようにサキュバスの女性器へと近づいていく。

ミレーヌ姫の両脚が僕の肩に乗って、性器の結合が秒読みに入ったことを告げる。

僕は右手で亀頭の首を摘み、姫が拡げてくれている蜜壺の口へと充てがった。

ぬるっとして温かな女性器の肉穴をナマのペニスで感じて、僕の心拍数は跳ね上がった。

今まさに憧れのミレーヌ姫とのナマ本番が始まるうとしている。

興奮するなというほうが無理だ。

「んぶっ♡どっぞ？遠慮せずにいらっしや♡」

僕らはお互いに同意が成立している。

きつと、最高に気持ち良いセックスになるはずだ・・・

はやる気持ちを抑えきれず、僕は無言で腰を進めた。

同時にミレーヌ姫も僕の亀頭に女性器を押し付けてくれる。

2人の協力は直ちに実を結び、ペニスは膣のナカへとヌルヌルと導かれていく。

膣への挿入感はその見た目より遥かに衝撃的だった。

憧れの姫君のオマンコに生挿入を果たすなり、厚く密度の高い性感が到底受け止めきれない強度で男根を包み込み、僕の全身を大きく震わせた。

「ウグツ・・・!!」

膣内にはまるでネジ穴のように細かな凹凸が数え切れないほどの刻まれており、それらが一斉に陰茎の纏わりついて擦りたてている。

数限りない膣肉のスケベ溝達はそれぞれが呼吸するかの如くヒクついて、僕が動かなくてもペニスを微小なストロークでシコつてくる。

1つの凹凸が扱く距離はほんの僅かだ。

だがそのデコボコはミレーヌ姫の膣壁に凄まじい数刻まれているのだ。

僕には腰を振る余裕などなかった。

膣ヒダの蠕動運動がペニスに与える濃厚過ぎる快感のみで僕の男性器はたちまち追い詰められてしまう。

ヒダ1つ1つの触感も格別だった。

愛液でぬめっているせいなのか、あるいは本来の擦り心地がそうなのか分からない。

しかし、男根で感じる肉壁の感触は、先ほど玉袋でたっぷりと味わった手袋の上質な布地を思わせた。

ああっ！

オマンコの奥、なんて気持ちいいんだ！

快楽に我を忘れ、僕はもっと気持ち良くなりたい一心でミレーヌ姫の膣奥の「モ」を抉ろうとする・・・が、間に合わない。

僕のカラダは最初の突起の一擦りですでにトドメを刺されていた。

腰を動かす間もなく鈴口はばくりと開いて、太く白い糸を吹くみたいにイカ臭い精液を子宮口へと次々注ぎ込んだ。

「ん♡あん♡いいわ♡初モノの味♡」

ドピューッ、ドピューッと間をおいて何度も射精が繰り返される。

そのたびにミレーヌ姫は身悶えして甘い吐息を僕の耳に吹きかけた。

僕は体を2回、3回と戦慄かせて子宮に子種を注ぎ、至高の快楽に酔いしれた。

「はあっ♡・・・ああっ♡・・・気持ち良いッ・・・♡♡」

ドピューーッ！ドピューーッ！

ドピューーッ！ドピューッ！

ドピュー、ドピュー・・・

「ああ♡最高でしたわ♡童貞勇者の初モノ精液♡」

僕は消耗し切った精力を振り絞って頭を上げると、ミレーヌ姫の唇にしゃぶりついた。

「ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡ちゅっ♡」

深々と性器を結合させたまま、僕達はしばらくキスを交わして愛を確かめ合った。

「ふう、はあ・・・」

「残念。勇者様はサキユバスに負けてしまいました」



「けれどこれは練習。何も問題はありません。精力が続く限り、何度も戦って経験を積みれば良いのです」

「諦めずに続ければ、きっと、いずれはサキュバスを倒せるはず」

「もっと、もっといっぱい負けてみたいよ」

「ええ。大丈夫よ。今晚は何度負けても構いません」

「今晚だけではないわ。明日もあさっても、その次も。何度負けても構いません」

「ただ、あまり負け過ぎると・・・♡」

「わたくしを本当に好きになってしまい、赤ちゃんも・・・うふ♡」

ミレーヌは嬉しそうに微笑んでまたキスを始めた。